2026年11月16日

生徒一人ひとりの「My探究」の問いに、企業・団体・専門家など43主体が伴走

～渋谷区立松濤中学校「シブヤ未来科」において社会接続型の探究授業を実施～

東急株式会社

当社は、特定非営利活動法人VIVITA　JAPANと共同でコーディネート・運営する、渋谷区立小中学校の仮設校舎「青山キャンパス」内の「未来共創空間」の取り組みの一環として、2026年9月から10月にかけて、渋谷区立松濤中学校の探究学習「シブヤ未来科」において、生徒一人ひとりの探究テーマに関連する企業・団体・専門家など43主体が参画する連携授業を全6回実施しました。

渋谷区が推進する探究学習「シブヤ未来科」のもと、同校が取り組む「My探究」は、生徒一人ひとりが自分の興味・関心を起点に問いを立て、探究する学習です。共通テーマを扱う「テーマ探究」と異なり、問いや必要とする専門知識が生徒ごとに異なるため、本取り組みでは、それぞれの問いに関連する企業・団体・専門家を当社が探してつなぎ、実体験や専門的な知見に基づく対話を通じて、生徒の問いを深める機会を設けました。

■本取り組みのポイント

- 生徒一人ひとりの問いに合わせて、全6回の授業を通じて、企業・団体・専門家など43主体の大人と対話の機会を設けました。
- 問いの内容に応じた相手探しから対話機会の設計までを担う「コーディネート機能」により、個別性の高い探究と社会との接点をつくりました。
- 大人が知識や正解を一方的に教えるのではなく、生徒の問いに反応し、ともに考える「壁打ち相手・伴走者」として関わりました。

■対話を通じた生徒の問いの深まり事例（エンターテインメントカテゴリ×業界プロデューサーとの対話）

社会接続前、3名の生徒は「どんな人がアイドルのプロデューサーになるのか」「アイドルの人気にプロデューサーは関係があるのか」「ヒット曲をつくる方法」という問いを立てていました。業界プロデューサーとの対話・壁打ちを通じて、アイドルや歌手本人だけでなく、プロデューサーをはじめとする関係者が共通のゴールを持ち、連携することの重要性に気づきました。その結果、問いは、プロデューサーに求められるスキルや役割、持続的な人気を生み出す仕組み、ヒット曲が生まれる背景にある関係者の目的やビジョンなどへと発展しました。

社会人との対話を通じて、子どもの問いが、目の前の疑問を解消するものから、仕事の役割や関係者の協働、成果が生まれる仕組みを多角的に捉えるものへと深まったことがうかがえます。

当社は引き続き、趣旨に賛同いただける企業・団体などとの連携を広げながら、渋谷区の探究学習と社会をつなぐ取り組みを推進していきます。子どもたちが実社会の課題に触れ、多様な世代の大人と協働することは、探究力を向上させるだけでなく、参画する大人側にも新たな気づきや価値観の変化をもたらします。当社は本取り組みを通じて双方向の価値創出を目指すとともに、「次世代を担う人材育成」と「社会課題解決」の両立に向けて取り組みます。



※詳細は別紙をご確認ください。

【別紙】

1. なぜ、社会との接続が必要か　～「My探究」を支える社会の力～

渋谷区が推進する「シブヤ未来科」では、子どもたちが自ら問いを立て、社会と関わりながら探究する学びを進めています。なかでも、生徒一人ひとりが自分の興味・関心を起点に問いを立てる「My探究」では、探究テーマが多岐にわたるため、教員だけで個々の問いに応じた専門的な情報や社会との接点を提供するには限界があります。問いの種類、必要とする専門知識、社会との接点は生徒ごとに異なるため、一人ひとりの問いに合わせて、企業・団体・専門家など社会の多様な知見とつなぐ仕組みが求められていました。

そこで今回、こうした課題の解決を目指す実証として、43主体の企業・団体・専門家に当社が協力を呼びかけ、生徒の探究カテゴリにできる限り沿った社会人との対話機会を設けました。

2. 本取り組みの特徴

本取り組みの特徴は、企業・団体が授業に参加すること自体ではありません。生徒一人ひとりの異なる問いを読み取り、その問いに関連する企業・団体・専門家を探し、適切な大人との対話機会をつくる「コーディネート機能」にあります。

（1）一人ひとりの「My探究」の問いに、大人が応える

企業連携型の探究授業は、共通のテーマに対して特定の企業が協力する形式が一般的です。本取り組みでは、生徒が自ら設定した多種多様な問いに対して、テーマごとにマッチングした43主体の企業・団体が参画しました。生徒は自分の問いに関わりの深い大人と出会い、反応をもらうことで、インターネットでは得られない実体験に基づく視点を得て、探究を深めました。

（2）問いを一つずつつなぐコーディネート機能

生徒一人ひとりの問いを把握し、内容に応じてカテゴリ分けしたうえで、関連性の高い企業・団体・専門家を探してつなぎました。対話の場では、大人が生徒の問いに反応し、問いの整理・具体化・深化を支援しました。また、適切なカテゴリを選ぶことが難しい生徒や、問い自体がまだ明確になっていない生徒に対しては、日頃から生徒の探究の壁打ちを担う「未来共創クルー」が対応し、問いの整理や具体化を支援しながら社会との接点をつくりました。

（3）「教える」のではなく「伴走する」大人

参画した企業・団体の大人は、講師として知識を教える存在ではなく、生徒の問いに反応し、ともに考えを深める壁打ち相手・伴走者として関わりました。子どもの問いに向き合う過程で、大人も自らの経験や価値観を問い直す新たな気づきを得る「共創」の関係を、生徒と企業の双方で実現しました。

参画企業・団体からは、傾聴力や質問力、相手に合わせた翻訳力、ファシリテーション力などが同時に求められ、自身のコミュニケーションやマネジメントを見直す機会になった、との声が寄せられています。

（4）「未来の学校」仮設校舎を社会とつながる実践の場として活用

校舎建て替え期間中の仮設校舎「青山キャンパス」は、最先端のICT環境と学習空間を整備し、『未来の学校』を先取りした学びを提供する拠点です。キャンパス内の「未来共創空間」を探究・社会接続のハブとして活用しました。

3. 授業後アンケートより

授業後のアンケート（回答数：生徒131名）では、「社会への理解が広がった」と回答した生徒は78%、「自分の問いが社会とつながっていると実感できた」と回答した生徒は68%でした。

4. 生徒の問いの変化

この社会接続を通じて、生徒たちは実社会での自分の問いの意義や価値、取り扱われ方を知り、問いをより深めたり、視点を広げたりしました。

（事例1）モチベーション研究企業との対話

社会接続前、「どんな環境が一番勉強に集中できて結果につなげられるのか？」という問いを立てていた生徒は、対話後、「暗記や読解、計算など、様々な勉強の種類によって自分に必要な集中環境は？」 とより深い問いに発展しました。

（事例2）エンターテインメントカテゴリ×業界プロデューサーとの対話

社会接続前、3名の生徒は「どんな人がアイドルのプロデューサーになるのか」「アイドルの人気にプロデューサーは関係があるのか」「ヒット曲をつくる方法」という問いを立てていました。業界プロデューサーとの対話を通じて、アイドルや歌手本人だけでなく、プロデューサーをはじめとする関係者が共通のゴールを持ち、連携することの重要性に気づきました。その結果、問いは、プロデューサーに求められるスキルや役割、持続的な人気を生み出す仕組み、ヒット曲が生まれる背景にある関係者の目的やビジョンなどへと発展しました。

社会人との対話を通じて、子どもの問いが、目の前の疑問を解消するものから、仕事の役割や関係者の協働、成果が生まれる仕組みを多角的に捉えるものへと深まったことがうかがえます。

5. 今後の「My探究」対応のニーズ

今後、子ども一人ひとりの興味・関心を起点とする「My探究」が広がる中で、多様な問いに応じて専門的な知見や社会との接点を提供する仕組みが、ほかの学校でも重要になると考えられます。今回の取り組みで、多様な問いを持つ生徒と実社会の専門性をつなぐためのコーディネート方法を実証したことは、今後、個別性の高い探究学習を支える仕組みを検討するうえで、他の学校にとっても参考となる事例になり得ます。

6. 関係者の声

■生徒の声

【生徒コメント1】

一番困っていた聞いてみたかった部分について相談できたことで、今後の探究の方向性が見え、すっきりしました。もっと話してみたいと思いました。

【生徒コメント2】

大人の方から詳しく話を聞くことができてよかったです。親や先生以外の方の意見を聞けてとても勉強になりました。また参加したいです。

■教員の声

社会接続を行うことにより、子供たちの問いに対してホンモノの回答を得ることができ、そこからまた新たな問いが立ち、先を見通した探究が実現できました。これをきっかけに子供たちは調査方法や探究の手法についても見直すきっかけになり、一人一人の探究がグッと深まりのあるものになりました。学校だけでは一人一人の探究テーマに対して、このように企業とマッチングさせることは難しく、それを東急さんが実現してくれて、本校のMy探究も教員が理想とする内容に一気に近付きました。

■参画企業の声

【コンサルティング企業】

中学生との対話では、こちらが知識や正解を一方的に伝えるのではなく、まず相手の話を聴き、考えを理解し、肯定しながら問いを投げ、必要に応じて自分の知見や社会との接点を伝え、最後は本人がもう一歩考えたくなる状態をつくる必要があります。傾聴力、質問力、相手に合わせた翻訳力、抽象と具体を行き来する力、短時間で

場をつくるファシリテーション力などが同時に求められ、自身のコミュニケーションやマネジメントを見直す非常に良い越境学習の機会にもなると思いました。

【エンターテインメント企業】
　長くエンターテイメント業界に身を置き多種多様なプロジェクトに参加してきましたが、今回のプログラムを通して、中学生の皆さんの生の声を直接聞けたことは、とても貴重な経験になりました。驚いたのは、すでにプロデューサーのような視点で物事を捉えている生徒さんが思いのほか多かったことです。私たちの予想以上に、皆さんがエンターテイメントについて深く考えていることを知り、自分たちのものづくりへの意欲が改めて湧いてきました。学校教育の一環として、現場で働く人と交流できる環境があることは本当に素晴らしいと思います。もし自分が中学生の頃にこうした機会があったら、進む道は違っていたかもしれない――そんなことも考えさせられました。また、さまざまな業界の第一線で働く大人たちが参加することで、生徒さんだけでなく、大人同士も互いに学び合えることは非常に貴重だと感じています。

【広告代理店】
　広告代理店の社員にとっては、若い世代の柔軟な発想に触れることで、日々の提案に活きるユーザーインサイトを知るきっかけになると思いました。社会貢献活動としても誇れる実績になると思います。

■渋谷区・渋谷区教育委員会のコメント
　生徒一人ひとりの問いに、多くの企業・団体の皆様が真摯に向き合ってくださったことに、心から感謝申し上げます。子どもたちが実社会の大人と対話し、自分の問いを深めていく経験は、「シブヤ未来科」が目指す、社会とつながりながら主体的に学ぶ姿そのものであり、大変意義深い取組です。

7. 生徒の問いの例（一部抜粋）
・短距離は速い人の走り方を真似すれば速くなるのか。
・どうすれば紙飛行機はよく飛ぶのだろうか。
・ライトセーバーの作り方。
・なぜ傘は進化してこなかったのか。またこれからどう進化していくのか。
・どうしたらピアノで人の感情を動かす弾き方をできるのか。
・なぜ人はありを踏み潰すのか。
・AI時代にどのように学問に価値を見出すべきなのか。
・MADムービーを人の心に残るように作るには？
・相手に説得力をもたせる話し方とは？
・全世界「佐藤」さんになったらどうなっちゃう？
・中1女子が6号球で遠くからシュートを届かせるには、体のどこの連動が必要か。
・能力を向上させるには、量と質どっちが大事なのか。

8. 参画企業・団体の内訳
　参画したのは、東急グループ7社を含む企業36社、個人事業主4名、自治体・協会3団体の計43主体です。上場企業から従業員1名のスタートアップ、書道家やサックス奏者まで、規模も業種も多彩な顔ぶれが、生徒一人ひとりの問いに応えました。

【参考】

1. 青山キャンパス・未来共創空間について

渋谷区では、渋谷区基本構想で掲げる未来像「ちがいを　ちからに　変える街。渋谷区」を目指して、子ども一人一人が個性を伸ばし、先進的で柔軟な考えを育むための教育に取り組んでいます。その中で、これから渋谷区が目指す学校の将来像を『未来の学校』と銘打ち、学校の校舎建て替えというハード面と、探究する学びや教育DXなどのソフト面の両面から、『未来の学校』プロジェクトを進めています。

校舎建て替え期間中に使用する仮設校舎（青山キャンパス、西原キャンパス）では、新校舎に先駆けて最先端のICT環境と学習空間を整備し、『未来の学校』を先取りした学びを提供しています。最初の仮設校舎となる青山キャンパスは、旧青山病院敷地に建設され、2025年9月に開校しました。青山キャンパス内にある「未来共創空間」とは、探究学習と連携し、生徒が実社会と深く関わりながら「正解のない問い」に挑み、視野や価値観を広げて自らの可能性を切り拓くための探究・創造拠点です。

そこでは、企業連携などを通じて個々の探究学習を深めるだけでなく、高性能な機材をアイデア具現化の「手段」として活用できる環境も整備しています。運営事業者による伴走支援のもと、インプットとアウトプットの両面から生徒の知的好奇心を刺激し、質の高い学びを実現する場となっています。

2. 当社と VIVITA JAPAN による「未来共創空間」の運営受託について

当社と特定非営利活動法人VIVITA　JAPANは、2025年9月から、「青山キャンパス」内の次世代の学びの場「未来共創空間」のコーディネートおよび運営を共同受託し、生徒一人ひとりの興味・関心を起点とした探究的な学習・活動を支援しています。映像機器や音楽制作機器、プログラミング機器を活用しアイデアを具現化する支援や、地域企業・団体と連携したワークショップやトークイベントの開催も実施しています。

参考リリース：https://www.tokyu.co.jp/company/news/detail/58836.html

3. 「まちづくり探究」について

当社は、2024年11月から「まちづくり」をテーマにした探究学習の授業支援を実施しています。二子玉川の街やロッテの商品特性を分析した商品プロモーション活動に挑戦する「探究フェスティバル」イベントや、伊豆急行線の運行やホテル開発・運営など当社グループが幅広い事業を展開している「伊豆」を拠点に、地域課題解決をテーマにした地方創生プログラムも提供しています。

参考リリース：https://www.tokyu.co.jp/company/news/detail/54806.html
https://www.tokyu.co.jp/company/information/detail/56541.html

4. 「子育て・学生応援 東急スクラムプロジェクト」について

東急㈱グループの多岐にわたるノウハウやアセットを活用し、子育て関連施設やサービスのさらなる強化・連携に取り組むことで、東急線沿線の子育て世帯や学生におけるサービス向上や家計応援を実現する取り組みです。「交通利用」、「まなび」、「お出かけ」、「暮らし」、「文化・体験」といったさまざまなシーンで、子育て世帯や学生の支援を推進することで、より住み続けたくなる沿線の実現を目指します。

この一環として誕生した子ども・子育て応援ポータルサイト「とうきゅうこどもっと」および公式Instagramでは、東急線沿線のお出かけスポット、イベントなどの最新の情報をお届けしています。

（参考）子育て・学生応援 東急スクラムプロジェクト：https://www.tokyu.co.jp/kodomoscrum/

（参考）子ども・子育て応援ポータルサイト「とうきゅうこどもっと」：https://www.tokyu.co.jp/special/kodomotto/

当社のイノベーション推進組織であるフューチャー・デザイン・ラボでは、「多世代共創」をテーマに、異なる世代の価値観が交わることで新たな発想や価値を生み出す体験を創出しています。大人と子ども、大学生と高校生、若手社員とベテラン社員など、幅広い世代の交流を通じて、それぞれの学びを深めます。地域と連携し、こうした学びの場を広げることで、地域価値の向上とより良いまちづくりを目指しています。

また、教育分野では、渋谷区の公立小中学校を対象とした官民連携プログラミング教育支援「Kids VALLEY 未来の学びプロジェクト」において、プログラミングや課題解決型学習（PBL）の授業支援をしています。また、「まちづくり」をテーマにした探究学習プログラムも展開し、実社会に近い学びの機会を提供しています。

さらに、東急㈱グループには、理工系を中心とした先進的教育を展開する東京都市大学グループや、非認知能力の育成を重視した民間学童保育「キッズベースキャンプ（KBC）」を展開する㈱東急キッズベースキャンプなど、教育事業に関する豊富な実績とリソースがあります。これらのノウハウを活かし、次世代に必要な学びの機会を創出しています。